

「慣れた道」でのご用心

慣れた道ほど事故を起こすケースが高い

幹線道路と違い、「生活道路」は気がゆるむ

～人を守ることは、自分も守ることにつながる～

2020/5/5(火) 0:00

新型コロナウイルスで、医療現場が切迫している今だからこそ、いつも以上に事故を起こさないよう安全運転を心がけましょう。

残念ながら、自動車が走れば交通事故のリスクとは切り離せない。

そして特に気を付けなければならないのは、慣れた道ほど事故を起こすケースが高いということだ。

国土交通省のデータでは、生活道路での事故は、幹線道路ほどには減っていない。

たとえば、帰宅する場面を考えてみよう。

幹線道路から生活道路に入って、我が家に近くなる急いた気持ちと、日頃から通り慣れた道に、『ホッとする気持ち』が混ざり合って気が抜ける瞬間がある。

事故はそんな心の隙間に忍び寄る。

生活道路を使う、歩行者や自転車など多くの人にとっても、そこは緊張感のゆるむ場所。

歩行者でいえばスマホを見ながら、あるいはイヤホンで音楽を聴いている人は、明らかに注意力が半減以下になっている。

後ろ姿からは何をしているか分からない歩行者が突然、道路の真ん中に出てくることもあるかもしれない。

自転車では、最近ママチャリの主流を占めている電動アシスト付き自転車は、坂の勾配にかかわらず結構なスピードで走っている。

多くの場合、歩行の延長線上の感覚なので、クルマ側は余計に注意を払うべき存在だ。

自粛続きで、元気を持て余した子供たちが、道路に飛び出してくる可能性だってある。

残念ながら、自動車は歩行者や自転車ほど俊敏ではない。

そして、自動車はその誰よりも強い存在だ。

だからこそ慣れた道、生活道路ほどいつもより注意深くハンドルを握ってほしい。

ちなみに歩行者、自転車の死傷者は50%がそれぞれの自宅から半径500m以内で起こっている。気の緩みもあるに違いない。

普段はあまり気にしていないかもしれない十字路にあるカーブミラー、商店街のガラスに映る人や自転車、学校の校門近くの横断歩道、同じ道幅が交差する裏道、事故を起こさないためのチェックポイントは結構ある。

人を守ることは、自分も守ることにつながる。